

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 1 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285208

研究課題名(和文) 日本植民地・占領地教科書にみる植民地経営の「近代化」と産業政策に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Industrial Policy and the "Modernization" in the Colonial Management Represented in Textbooks Used in Japanese Colonial and Occupied Territories

研究代表者

西尾 達雄 (NISHIO, TATSUO)

北海道大学・教育学研究科(研究院)・特任教授

研究者番号：30180582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,700,000円

研究成果の概要(和文)：これまでの植民地教科書研究は、様々な植民地及び占領地教育の特徴を示してきた。本研究は、これらの特徴に対する産業政策や植民地経営の「近代化」政策による影響を究明しようとするものである。第一の方法は、教科書及び教育実践からその影響を抽出した。そして第二に、それらの異同を考察した。しかし、われわれは、次の問題での基本的共通理解が困難であった。一つはそもそも「近代化」とはなにかということであり、もう一つは、産業政策の影響とは何かということであった。さらに地域的な特性やその「異同性」の究明は、地域や教科などを網羅できなかつた限界から分析不十分であった。今後の研究課題である。

研究成果の概要(英文)：The previous studies on colonial textbooks showed various characteristics of the colony and occupied territory education. This study investigates the influence exerted by the industrial and "modernization" policy on these characteristics. Firstly, we extracted the influence seen in textbooks and educational practices. Secondly, we compared the differences. However, we had difficulty in sharing common understanding of two important problems. One is what "the modernization" means in the first place. The other is what we regard the influence brought by the industrial policy. Analysis was insufficient in regional characteristics and "difference in those characteristics", because we have limitation to cover all of the regions and subjects. These are research themes should be done in future.

研究分野：身体教育学

キーワード：植民地・占領地 教科書 教育実践 近代化 産業化

1. 研究開始当初の背景

植民地・占領地教科書を産業政策と植民地経営の「近代化」との関連で探るといふ本研究の起点は、日本植民地研究の古典的名著の一つである矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』(1929年)にある。そこには、産業政策を分析することで、なぜ、国語強要政策が展開され、教育制度が拡張したのかが理解される意図が語られていた。

産業政策の進展に応じた教育政策の即応については、植民地朝鮮における体育政策で示された身体要求の変化や、1920年代初頭における女子の家事科・裁縫科、男子の職業科の設置及び、1930年代の労働と教育の結合を方針にする産業教育の展開などに現れている。また歴史教科書では、1930年代はじめから郷土の産業を担う農民や労働者、そして「農村婦人」の育成を目的とする内容が登場する。台湾では、1930年代に郷土教育運動が広く学校教育に影響を与え、郷土に生きる産業人(農民や労働者など)の低度実業教育の方針が採られていたことが明らかにされている。しかし、満州の産業構造と教育政策との分析は、不十分のままといえる。

東南アジア諸地域、いわゆる「南方」では、1941年以降の教科書記述が主な課題になる。これまでの分析軸は、日本主義イデオロギーの浸透(同化主義)と支配的な地域共同体建設に適うコミュニケーション能力の形成という、二つの視点が重要であった。したがってこの地域では、産業政策の進展に応じて、国語教材にいかなる変化が起きていたのかが分析が必要となる。

2. 研究の目的

近年の植民地・占領地教科書研究は、次のような成果を生み出している。植民地教育における内地延長主義に対する「現地適応主義」の採用の実態(たとえば、満州の『皇国の姿』など)、日本国内における教育を先取りする実験的試行とその成果の内地への「環流」(たとえば、朝鮮・台湾における理科教科書と国定理科教科書の比較研究)、新教育思想を巧みに取り入れた台湾の郷土教育、労作教育・学校劇や台湾・朝鮮の自由画教育などである。

本研究は、こうした「現地適応主義」、「実験的性格」や「新教育の受容」といった教科書に現れた植民地・占領地教育の特徴が、産業政策や植民地経営の「近代化」政策による影響を強く受けたものと捉え、その影響を多様な教科から総合的に実証しようとすることを目的とするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、第一に、教科書の記述における「産業化」あるいは産業政策との関わりがどのように現れているかを明らかにする。第二に、その記述が産業政策の進展とどのように関わっているか、とりわけ、人材

養成との関わりを分析する。その中で第三に、ジェンダーバイアスの記述について検討する。つまり、産業の進展に応じた「農村婦人」に必要な資質形成の変化という視点から分析する。そして第四に、これらの分析を通して植民地・占領地間の地域的な差異と共通性を検討する。

このような植民地・占領地の教科書と産業化との関係を分析する試みはまだ緒に付いたばかりである。すでに指摘されている産業政策の転換に伴う教科目標の変化を教科書等の内容と方法から迫ることによって、植民地・占領地の教育実態をより具体的に示すことができる。またその実態は、統治のあり方によって異なっていることが予想され、新たな植民地・占領地教育像の解明に繋がると考えられる。

(2) 4つの教科グループ(国語、地理・歴史、修身、実業・実技)に分かれ、それぞれグループごとに日本植民地・占領地の担当者を決め、担当者ごとの課題を設定して討議検討を行った。国語グループでは、台湾、朝鮮、南方の「教科書」について、近代化をキーワードに、時期、分野にそって課題を抽出し分析検討した。歴史・地理グループでは、「教科書」における「近代化」・産業化のキーワードを鉄道、教科書の挿絵や写真の分析などから接近した。修身グループでは、修身教科書に見られる「近代化」と「産業化」について1910年代から30年代の台湾、朝鮮、満州を対象に国内外の資料調査し分析を試みた。実業・実技グループでは、「近代化」と「産業化」の教科書への影響について、朝鮮の理科、青島の商業、朝鮮の手工と音楽、朝鮮の体操、国定・植民地・占領地教科書を対象に調査し検討した。

4. 研究成果

(1) 3カ年の研究成果を以下の報告書として発表した。

「日本植民地・占領地教科書に見る植民地経営の『近代化』と産業政策に関する総合的研究」、平成25年度～平成27年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(一般)、課題番号25285208、研究成果報告書、2016年3月。

(2) 各研究グループの成果の概要は、以下の通りである。

本研究遂行上まず「近代化」・産業化の概念についての共通理解を図った。そこで明らかになったことは、支配政策としての「近代化」が、必ずしも被支配者の主体的近代化に結びつくものではないことであった。また、教科書における「近代化」・産業化の具体的な表現をどのように特定するのかについて、それぞれの論者の判断にゆだねられた。

(3) 「第一部 国語教科書と近代化・産業化」では、台湾、朝鮮、南方について考察している。

台湾公学校「国語科」教科書(台湾読本)と国定読本の政治的教材を分析した合津美

穂は、まず、これらの教材が、共通教材、台湾独自教材、国定独自教材の3つに分類し得ることを指摘し、その特徴として、台湾人に対する差別的な叙述に加え、台湾・国定独自教材の存在は、台湾読本が「近代化」とは程遠い植民地教科書であったことをあげ、これらの教材群の政治的要素の異同は、台湾人児童と日本人児童に対する教育内容に「大きな不均衡」が存在していたことの証左となり得ることを指摘している。陳虹ブンは、日本統治期の台湾においては、伝染病の防遏及び台湾民衆の生活環境問題、衛生問題が重大な課題であり、最も基本的な衛生問題を解決しなければ、植民地統治も近代化も始まらないので、総督府も中央集権的な態勢をとり、防疫対策を推進していたとして、「植民地時期台湾の初等国語教科書にみる衛生概念の展開と近代化」について検討している。その結果、台湾における衛生問題改善の沿革と各時期の特徴を基に、それに対応する各時期の国語教科書の中に衛生関連教材が取り入れられたことを明らかにしている。林嘉純は、『国語読本』の「農業」に関する内容を始め、明治期から昭和期にかけて出版された「農業科」の教科書、及び各時期に制定された農業に関する教育規則、農業発展の実態と教授実態などを検討し、『国語読本』に現れた「産業政策」との関わりに言及している。その結果、時代を経るにしたがい「農業知識の養成」から「農業改革」に変化し、「実業養成」の影響が窺えるようになるとしている。

北川知子は、朝鮮植民地支配政策の一つである産米増殖計画(1920.12.~)が「国語読本」の米・稲作に関わる教材叙述にどのように表出したかについて、実際の学習活動として公立普通学校における農業実習活動記録についても併せて考察しながら、そこで求められた「理想の朝鮮農民像、めざす子ども像」を検証している。植民地政策は多くの朝鮮農民の困窮と流出、朝鮮農業のモノカルチャー化をもたらした。その中で、農業改良の指導的役割を期待される人間像の抽出や産米増殖計画の進行に合わせ、朝鮮米の商品価値を強調する教材が登場していることを明らかにしている。そして今後の課題として、宗主国側の人間と被支配者側の人間の格差をそのままにして、「主体的に農業改良に取り組む農民」をロールモデルに示すための教材・学習活動の工夫は教育現場に矛盾をもたらさなかったかを考察することをあげている。

南方軍政の重要な拠点であったシンガポールについては、櫻村あい子が、ラッフルズ大学とキングエドワード七世医科大学の歴史及び昭南工業学校の『工業日本語読本 巻1・巻2』の分析を試み、日本占領下のシンガポール社会の近代化の意味を考察している。そこから明らかなのは、中等・高等教育を閉鎖し、実業教育のみに重点を

置いた教育支配であり、それを乗り越えたシンガポール人の努力によってこそ、戦後の近代化が達成されたのではないかとしている。小林茂子は、南洋群島における委任統治政策の「文明化」の取り組みが、『南洋群島国語読本』(第一次~第四次)のなかでどのように表出されているのかを検討している。その結果、「衛生」「農業」「時間」関連の『国語読本』の記述からは、より平易な記述方法、道徳的意識の喚起、役人の登場、挿絵の工夫などの特徴がみられ、日本の統治をより受容しやすい住民を育成するという教育的意図が指摘できるとし、こうした「文明化」への取り組みは、国際社会から日本が一等国としての評価を得ようとする努力の一端であると考えられるとしている。同じく『南洋群島国語読本』に見る近代化の意図を検討した清水知子は、第四次『南洋群島国語読本』が第三次本から引き継いだ課を抽出し、その改変の方向性を探っている。その結果、支配システムの中で島民と接する人物(巡査、村長)を場面の中に書き加え、支配者側が管理する機関(郵便局、裁判所)制度(改良住宅、貯金、品評会)等の親しみやすさ、優越性を喧伝する等の改編手法が浮かび上がったことを示し、島民を南洋庁システムの末端に位置付けようという政治的、教育的意図を指摘している。

(4)「第二部 歴史・地理・修身教科書と近代化・産業化」では、朝鮮の歴史・地理、南方の社会教化、台湾、朝鮮、満州の修身を検討した。

佐藤広美は、修身や歴史の教科書で強調される「近代化」や「産業化」の記述が、「韓国併合と植民地支配の正当化」のためであり、現実の実態とは異なり、朝鮮人居住地域と日本人居住地域に分かれ、インフラ整備等も二極化していたことを改めて指摘し、「近代化」論への批判的課題を提起している。白恩正は、鉄道を近代化・産業化の象徴的なものとして捉え、その近代産業社会の形成に与えた影響は大きいとして、朝鮮の地理教科書において、「鉄道」がどのように記述されているかを提示すると同時に、その「近代性と侵略性」を考察している。その結果、朝鮮の地理教科書は朝鮮人児童に鉄道の「近代性」のみを効率的に伝える手段として使われたとしている。韓ヒョンジョンは、「戦前地理教科書における写真使用と帝国空間の認識」というテーマで、教育における視覚的伝達の展開を明らかにするために、両次戦間期に領域を拡張していく帝国日本という状況を児童に伝える地理教科書の風景写真の技法を取り上げて考察している。その結果、帝国の地域別に並べられた教科書の風景写真は、国境のように見えないものを実体化し、内地・外地の特徴を一例に並べることで連携や格差を表し、自然を無垢で精神的対象としてみ

るまなざしを形成したとし、各地域の写真は、写実性の中で帝国を一定の方向で解釈可能な空間として表現したとしている。

松岡昌和は、映画を社会教育の教科書(教材)と捉え、日本占領下シンガポールにおける映画工作の実態を、社会教育のメディアを通じた近代化の一側面として検討している。その結果、現地の劇場ではアメリカ作品が多く上映されており、日本映画でもアメリカニズムを強く指摘された作品が繰り返し上映されていたことなどから、日本映画の住民教化の効果は疑わしいとし、イギリス植民地としての歴史と、同地のスクリーンを席卷していたアメリカニズムの前に、日本の近代化モデルを示そうとする映画工作は当初より限界をはらんでいたとしている。

台湾「公学校修身書と理科書に見られる近代」をテーマにした白柳弘幸は、台湾総督府が「本島衛生状態の改善を以て統治政策の根幹」とし、伝染病撲滅等にそれなりの成果をあげたこと、初等教育機関に於いては児童用教科書発行初期から末期に至るまで修身科や理科で台湾人児童に「衛生」「清潔」が必要大切であること、それを裏付ける科学的知識を教えたことを確認し、二科が相補しつつ個人や家庭及び学校、地域社会の衛生向上を目指したとしている。しかし、学校教育としての「衛生」「清潔」指導が、伝染病撲滅にどの程度の効果があったかについて数値をあげて検証することは困難で、ここに本稿の限界があるとし、帝国日本は総督府を出先機関として台湾を統治したが、日本自身は他のアジア諸国に先駆け近代国家として歩み出したばかりであった。不十分ながらも身につけ始めた西洋近代を、あたかも日本の近代として試行錯誤しつつ移植したのが台湾植民地統治であった。本稿で述べた衛生事情もその一つであったとしている。本間千景は、朝鮮総督府編纂の第一期及び第二期『普通学校修身書』と『普通学校修身書 教師用』に「近代的身体」がどのように表象されていたかについて検討し、文部省『小学校作法教授要項』及び国定修身書『教師用』との関連性を考察している。普通学校では、内地式近代的身体を形成していったが、慣習の違いにより児童が混乱し軋轢を生む要素もはらんでいたこと、「分相応」な教育及び職業選択をするよう指導されていたこと、より高い教育を受け立身を望むことは「失敗の本」と諭すよう『教師用』には示されていたこと、女性の近代的身体として描かれたのは良妻賢母に関する記述であったことなどを指摘し、就学率の低かったこの時期に普通学校に通うこと自体が「エリートの第一歩」であったし、内地式近代的モラルと近代的身体が「植民地当局のみならず、民族運動・社会運動を推進する人々の間でも希求されていくことになった」としてい

る。宮脇弘幸は、「満洲」経営の近代化・産業化と満洲教育について修身教科書を中心に言及している。その結果、「満洲」における教育は実業教育に重心が置かれたこと。修身教育は、主に家庭・学校・社会における身の修め方、人間関係のあり方など人倫道徳を教える教材が中心であったこと。特に新学制以降は建国精神、日満一体性が強調され、さらに「皇道主義」、「惟神の道」へと変質したこと。よって、修身教材は、国の「工業化」「産業化」に直接関連するものではなかったが、間接的には生活の近代化、社会の近代化に一定の影響を与えたであろうことは否めないとしている。

(5)「第三部 実業・実技教科書と近代化・産業化」では、植民地・占領地教科書の比較、朝鮮の体操、理科、手工、音楽、満州の実業、中国の商業を検討している。

北島順子は、植民地・占領地教科書の中の「集団秩序運動」に関する記述・記載を整理・分析し、国定教科書と比較検討し、特に規律的身体に着目して、教科書にみる身体と近代化について考察している。その結果、植民地・占領地でめざされた身体像は、支配者に自発的・主体的に「従順な身体」を涵養することであったとして、その「近代性」は「規律的身体」に重点を置かれたものであったとしている。西尾達雄は、1920年代の産業政策と体操科に関わる政策的側面の裏面として、それとは一線を画する民族主体としての体育実践を韓国における体育史研究ではどのように認識しているかを検討している。韓国体育史研究にみられる1920年代の体育実践に関する叙述は、衛生と体力問題での科学化、暴力否定とフェアな運動精神を強調する「運動道」の創出、女性体育の奨励、独自領域としての体育学の展開などが民族主体の問題として語られており、ここに主体的な近代化の認識がみられるとしている。井上薫は、農業科で連絡が強調された理科書を取り上げ、植民地朝鮮の主要産業であった稲作・米の増産と初等教科書の記述の関わりを考察している。その結果、発行が農業書に先行した1910年代の稲関係記述は多く、1920年代は「内地準拠」で減少したが、1929年の職業科必修化にもかかわらず農業・職業教科書がなかったため、朝鮮独自編纂の『初等理科書』(1931年)では品種差への関心を喚起し、同教師用書では農事試験場と連携した奨励品種を説き、稲作改良を訴える等、産業政策の強い反映状況が明らかであったとしている。佐藤由美は、朝鮮の初等教育における手工及び工作教科書の編纂趣意や目次を考察し、昭和13年には朝鮮の独自性を活かしながら産業教育の布石を敷き、勤勉な皇国臣民の育成を課したが、昭和16年以降は機械教育、特に航空教育が重視されたことを指摘し、手工教育における産業化の軌跡は農業から工業、さらに軍事産業

へと移行していくのが読み取れるが、実際には朝鮮の初等学校での産業化は工業よりも農業でより現実的で、地域の独自性とも密接な繋がりを持っていたのではないかと推測されるとしている。金志善は、植民地朝鮮における初等音楽教育において流行歌の認識とその関係について考察している。特に、当時の教育実態においては、初等教員であった安文英が書いた「低学年に於ける私の唱歌科指導の新方向」の記事に注目し、教員の経験に基づく唱歌指導法、唱歌科目における児童の音楽環境調査により、当時流行歌が音楽教育に及ぼす被害について明らかとなったとしている。1920年代の産業政策と体操科に言及した西尾達雄は、体操科現場が担った身体的課題と産業政策で求められた身体に言及し、産業政策によって生み出された「体操の半島化・郷土化」の実態が、朝鮮人が将来担う労働にふさわしい身体を求めるものであったとし、それはまた、「一視同仁」などの表面的な平等主義とは裏腹に日本人と朝鮮人の体育を別々の目標の下に行うものであったとしている。丸山剛史は、技術・職業教育史研究の課題として原正俊の指摘した「満州国」の新学制の国民高等学校における実業教育に注目し、満州における実業教育の成立背景について言及している。その結果、満州技術協会は、満州の技術者の親睦団体であったが、協会内に委員会を設置し、工業教育、技術者養成に関する調査研究を行い、関係機関に建議まで行っていたこと、実業教科書編纂に実業系高等教育機関教員の役割があったことが示され、今後技術協会や同関係者の動きを探ること、国内の実業系高等教育機関教員との関わりからの分析、そして「満州国」の国民高等学校と加藤完治等の国民高等学校との関わりについて検討すべきであることを課題として指摘できるとしている。山本一生は、私立青島学院商業学校を事例に学科課程編成の変化を検討している。その結果、学課課程は日本政府からの補助金、在外指定の認可によって「内地」の学制に包摂されていったが、1921年の商業学校開設時に「日支共学」を理念とし、日本語教育を中心とする予科を商業学校に附設させたことが「内地」との違いであるとしている。しかし学院の「日支共学」理念はあくまで「日本の学校」に中国人学生が入学する、という形式を取っていたとしている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 14件)

佐藤広美、植民地教育支配と「モラルの相克」、植民地教育史研究年報 18号、査読無、2016年3月、10-30頁

井上薫、「朝鮮総督府学務官僚 大野謙一の植民地教育・植民地支配観」、『植民地教育支配とモラルの相克』、植民地教育史研究年報 18号、査読有、2016年3月、48-63

白柳弘幸、台湾教育史遺構調査(8) 公学校とその母体となった宗教施設、植民地教育史研究年報 18号、査読有、2016年3月、208-215

井上薫、図書紹介「鄭在哲著/佐野通夫訳『日帝時代の韓国教育史 日帝の対韓国植民地教育政策史』」、教育史学会『日本の教育史学』(教育史学会紀要)第58集、査読無、2015年10月、165-167

西尾達雄、シンポジウム『植民地近代と身体』開催趣旨と概要、植民地教育史研究年報 17号、査読無、2015年3月、10-30

本間千景、1930年代農村振興運動と農民教育 - 京畿道編『京畿道農民読本』を中心に -、植民地教育史研究年報 17号、査読有、2015年3月、124-147

西尾達雄、1920年代植民地体育・スポーツと民族主義の関わり(1) 李學來著『韓国體育百年史』の翻訳を通して、植民地教育史研究年報 17号、査読有、2015年3月、155-173

白柳弘幸、台湾教育史遺構調査(その7) 植民地教育史研究年報 17号、査読有、2015年3月、196-202

小林茂子、開戦前後におけるマニラ日本人学校にみる教育活動の変容 - 発行された副読本と児童文集を手がかりに -、国際日本文化研究センター『日本研究』第50集、査読有、2014年9月、235-257

陳虹ブン、本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究(その3) - 第三期読本を中心に -、平安女学院大学研究年報第14号、査読有、2014年6月、52-60

西尾達雄、「植民地と身体」に関わる研究動向、植民地教育史研究会年報 16号、査読無、2014年3月、145-164

金志善、日本人中等音楽教員の活動からみた近代朝鮮の西洋音楽の受容 東洋音楽 第34巻、ソウル大学東洋音楽研究所(韓国、ソウル)、2013年8月、109-130

西尾達雄、わが国におけるニルス・ブック基本体操の評価と批判に関わる一考察、大熊廣明監修、『体育・スポーツに見る戦前と戦後』、道和書院 2013年6月、96-114

陳虹ブン、日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究(その2) - 第二期読本を中心に -、平安女学院大学研究年報第13号、査読有、2013年6月、1-9

[学会発表](計 16件)

宮脇弘幸、「日本支配下中国東北部における実業教育」、第四回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015年8月18日、延辺大学(中国吉林省延辺市)

山本一生、「外地」における日本側中等商業学校卒業生の進路 私立青島学院商業学

校を中心に、2014年8月9日、アジア教育史学会、明治大学駿河台キャンパス(東京都千代田区)

宮脇弘幸、The Japanese language in the former Japanese colonies-diffusion policy & school textbooks、2014年シドニー日本語教育国際研究大会、2014年7月12日、シドニー工科大学(オーストラリア・シドニー)

金志善、植民地朝鮮における第3次朝鮮教育令・国民学校令による初等音楽教育 当時初等教育を受けた証言者のインタビューと当時の学習ノートの事例を中心に、アジア教育学会第17回研究例会、2014年4月19日、早稲田大学(東京都新宿区)

金志善、植民地朝鮮における戦時総力戦体制の展開に伴う音楽の一元化と日本人の活動、洋楽文化史研究会第77回例会、2013年12月14日、早稲田奉仕園セミナーハウス(東京都・新宿区)

金志善、植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会の実態、東洋音楽学会第64回大会、2013年11月9~10日、静岡文化芸術大学(静岡県・浜松市)

Miyawaki Hiroyuki The aftereffects of Japanese language dominance in the former Japanese territories: will their language fade out? 14th International Conference on Minority Languages, University of Graz, Austria, 11-14 September 2013

西尾達雄、朝鮮近代体育・スポーツと日本 キーノートレクチャー、第65回日本体育学会体育史専門領域、2013年8月29日、立命館大学草津キャンパス(滋賀県草津市)

宮脇弘幸、日本統治下中国東北部と大陸占領地における文教政策 その共通性と相違について、第三回中日韓朝語言文化比較研究国際検討、2013年8月19日-22日、延辺大学(中国吉林省延辺市)

〔図書〕(計 2件)

宮脇弘幸、李筱平・范苓主編『跨越文化：中日跨文化交流；文化を超えて 中日の異文化間コミュニケーション』(日文版)、「第4章 対人関係とコミュニケーション」、科学出版社(北京)、2015年7月、190(執筆73-100)

宮脇弘幸、(李東哲 安勇花編)「日本統治下中国東北部と大陸占領地における文教政策-その共通性と相違について」、『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語言文化研究 第三輯 上、下』、延辺大学出版社、2014年6月、1059(執筆598-606)

6. 研究組織

(1)研究代表者

西尾 達雄(NISHIO Tatsuo)

北海道大学・大学院教育学研究院・特任教授

研究者番号：30180582

(2)研究分担者

中田 敏夫(NAKADA Toshio)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60145646

(平成26年度より研究協力者)

佐野 通夫(SANO Michio)

こども教育宝仙大学・子ども教育学部・教授

研究者番号：20170813

佐藤 広美(SATO Hiromi)

東京家政学院大学・現代生活学部・教授

研究者番号：20205959

上田 崇人(UEDA Takahito)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90326421

(平成26年度より研究分担者)

(3)連携研究者

白柳 弘幸(SHIRAYANAGI Hiroyuki)

玉川大学・教育博物館・学芸員

研究者番号：20424327

井上 薫(INOUE Kaori)

釧路短期大学・幼児教育学科・教授

研究者番号：70299717

佐藤 由美(SATO Yumi)

埼玉工業大学・人間社会学部・教授

研究者番号：10399123

陳 虹ブン(CHIN Kobun)

平安女学院大学・国際観光学部・准教授

研究者番号：60534849

(4)研究協力者

渡部 宗助(WATANABE Sosuke)

宮脇 弘幸(MIYAWAKI Hiroyuki)

一盛 真(ICHIMORI Makoto)

丸山 剛史(MARUYAMA Tsuyoshi)

北島 順子(KITAJIMA Junko)

本間 千景(HONMA Chikage)

清水 知子(SHIMIZU Tomoko)

合津 美穂(GOHZU Miho)

北川 知子(KITAGAWA Tomoko)

小林 茂子(KOBAYASHI Shigeko)

樫村 あい子(KASHIMURA Aiko)

山本 一生(YAMAMOTO Issei)

松岡 昌和(MATSUOKA Masakazu)

白 恩正(BAEK Eunjeang)

林 嘉純(LIN Chiachun)

韓 ヒョンジョン(Han HyungJung)

金 志善(KIM Jiesun)